



「時代」と「ご縁」。そんな言葉が頭に浮かびました。

私が弁護士登録をしたのは平成6年。世の中バブルははじけたけど、弁護士業界は「もうちょいいけるかな」という感じの時代でした。私もそんな感覚で企業法務を中心とする弁護士業務を開始しつつ、同じ事務所の宮川勝之先生が注力していた倒産業務も手伝いました。ちょうど倒産が増え始めた時代です。

そんな折、私の弁護士人生に1つの転機が訪れました。バブル崩壊→金融機関の不良債権の発生→金融機関の破綻。銀行がつぶれるという、それまでの常識では考えられない金融破綻の時代が来たのです。私も弁護士を5年ほど経験し、同期の弁護士が海外留学に行くような時期だったので、何か変化を求めていたころでした。ご縁のあった同じ会派の当時副会長の廣瀬哲夫先生から二弁の理事者室で缶ビールを渡され、「面白い人事があるよ」と言われたのを今でもよく覚えています。それまでは弁護士が国という権力組織に入っていくということは考えられない時代でした。そんなころに「公務員にならないか」と言われたのです。前例もない話で、また弁護士登録も抹消しなければならなかったので正直悩みました。ただ、これも何かのご縁と思い、平成11年

から2年ほど金融機関の破綻処理をする役所の公務員をすることになりました。今では任期付公務員という制度がありますが、これが今の公務員弁護士の時代の実質的な始まりです。



幸村 俊哉 (46期)

●Toshiya Yukimura

平成13年に弁護士に戻ってからは破綻した金融機関から切り離された不良債権の回収業務を、今は亡き岸和正先生に声をかけて頂き一緒に行いました。また、公務員時代に成立した民事再生法に基づく再生案件もやり始め、平成16年には民事再生の本も出版して、久保利英明先生に出版記念パーティーまで開いて頂きました。「失われた10年」という言葉がありましたが、まさにバブル崩壊後の日本経済の後始末の仕事をしてきました。

その後、一時的ですが日本経済にもわずかながら回復基

調がみられ、倒産の件数も減ってきたころに、ちょうどまた小さな転機が訪れました。日本の人口が減少し少子高齢化が問題になり始めた平成17年のころです。「中小企業の事業承継」。そんな言葉もまだ浸透していない時代です。中小企業が「事業承継協議会」という組織を立ち上げるので、弁護士会も関与してみないかとの話を、二弁で同じ委員会にいらした鳥飼重和先生からのご縁で頂き、「事業承継ガイドライン検討委員会」等の事務局弁護士となりました。二弁では「事業承継研究会」という法律研究会も立ち上げ、事業承継に関する本も何冊か出版し、今では私の弁護士業務の柱の1つになっています。

以上のように、私はバブルの崩壊や少子高齢化時代などの日本の状況に応じて業務をしてきました。もちろん私がバブルを崩壊させたり、少子高齢化を引き起こしたわけではありません。自分では時代を変えることはできませんが、業務を切り拓くことはできますし、時代の要請に応じた仕事もできます。そしてそこには必ずご縁が介在しています。まだまだ弁護士人生の道半ばですが、これからもご縁を頂いた先生方に感謝しつつ、時代の要請に応えられるよう、残りの弁護士人生を大切にしていきたいと思ひます。■

Hanamizuki

花水木

29



谷垣 雅庸 (62期)
●Masanobu Tanigaki

「能力を持った者には、それを正しく行使する責務がある。」

テレビドラマ『白い巨塔』(2003年版)の主人公である財前五郎の手紙の一節です。この手紙は、最終回、財前五郎の遺体が解剖室へ運ばれるシーンで読み上げられるのですが、盟友・里見脩二に宛てた遺書ともいうべきもので、クライマックスを飾るに相応しい重みのある文章です。

意図したわけではないのですが、私は何度かこのドラマを視聴しています。

ちょうど8年前、私は司法修習生として山口地方裁判所に配属され、修習生活を送っていました。同期や指導担当の先生にも恵まれ、傍から見れば充実した修習生活だったと思います。しかし、私は、無気力修習生として、徒食の日々を過ごしていました。自分が希望する進路につけなかったからです。

周りの同期は就職活動に大忙しという感じでしたが、私は毎日ぶらぶらしていました。山口の魅力に満喫し、そのまま集合修習を迎え、二回試験を終えたら、立派な二トになりました。

二トとなった私は、貯金

を切り崩しながら、自由気ままな生活を過ごしていました。同期たちは実務につき華々しく活躍していましたが、不思議と焦りはありませんでした。ただ毎日好きなことだけをして過ごしていたので、楽しいことは楽しかったのですが、今振り返ると死んだような生活だったなと思います。当時、こまめに連絡をいただいていた指導担当の先生や、教官、同期たちは、大いに心配し、呆れていただろうと思います。

そんな生活を送っているときに、なぜか何度目かの『白い巨塔』を視聴することになりました。

その中で、冒頭の手紙の一節です。

自分に能力があるなどとは到底思えませんでした。一応は司法修習を修了したのだから最低限の能力はあるかもしれない、行使する責務を果たさねば、と思ったのです。財前五郎の手紙で。

今思えば、何かしらの末期症状だったのかもしれませんが、とにかく心を入れ替えて仕事を探すことにしました。その矢先、大変幸いなことに、東京の事務所に就職した同期から、「事務所に空きができるから面接を受けに来ないか。」と連絡をもらいました。当時私は大阪に住んでお

り、東京は縁遠い場所だと思っていましたが、全く躊躇はありませんでした。

木曜、金曜と2日続けて面接を受け、何とか採用していただくことになりました。家も決まっていない状態で月曜から執務することになりましたが、やっぱり全く躊躇はありませんでした。

以降、多くの先輩方から指導を受けながら、何とか登録8年目を迎えました。登録当初から司法修習委員会に所属しているのは、私のような無気力修習生に対して元無気力の先輩として何かしてあげられればという気持ちからですが、今のところ、出番はありません。

「屍は生ける師なり。」

これも財前五郎の手紙の一節です。屍のようだった過去の自分を反面教師に、これからも精力的に職務に邁進したいと思います。

▲



山口県長門市の元乃隅稻成神社